

## 日本近代におけるドイツへの傾斜

—「日本近代美学におけるドイツ（学）的契機」序章—

浜 下 昌 宏

### Japanese Access to Prussia in the Meiji Era

HAMASHITA Masahiro

#### Abstract

The basic research subject of this paper is on the question as to why Japanese humanities, in particular, philosophy and aesthetics had been so much focused on German scholarship in the Meiji era. As preliminaries, I try to trace several factors leading to German origins to make a rough sketch of them. (1) The Iwakura mission experienced similar conditions to Japan in Germany: a developing nation for the nation-state, the emperor system with a constitution, etc. (2) ITO Hirobumi made the greatest effort to devise the Meiji constitution following the advice from Professor Lorenz von Stein who was willing to support Japanese for their political and legal development. (3) AOKI Shuzo was the key person for the pro-Germany group in Japan. He was clever enough to understand Europe and European's virtues not only in terms of scholarship but also of customs and society. (4) Most Japanese students who became leaders of a distinct field, mostly in the field of the humanities, studied at the University of Berlin. It would be interesting to know the reason, when there were a lot of eminent universities in Germany. Japanese access to Germany, in particular to Prussia, would have been resulted from some psychological or political foundations.

**キーワード：**明治政府とプロイセン、岩倉使節団、ロレンツ・フォン・シュタイン、青木周蔵、ベルリン大学

**Key words:** Meiji Government and Prussia, the Iwakura mission, Lorenz von Stein, AOKI Shuzo, the University of Berlin

## 【はじめに】

幕末明治にかけて、欧米の諸外国からの文物のみならず人材の導入もまた、日本のいわゆる近代化への推進役をはたした。その際、たんに「欧米の諸外国から」とすませるのではなく、模範とした欧米を“先進国”と解したのは、工業化・都市化・立憲政治等々の整備の前提としての「国民国家」形成の点で先進国と理解したのであった。そこで、各国のそれぞれの事情や特徴から、近代日本が学んだのも各国に合わせて、そして我が国の実態に即しての採長補短主義であった。そこで国別にみても、たとえば、長崎のグラバーをはじめ、工部学校のお雇い教授のダイヤー、横浜に永住した英字紙主筆のフランシス・プリנקリーといったスコットランド系の西洋人の功績や関係も興味深い。イングランド人だけが、大英帝国の植民地経営の提督的教育と訓練を受けたわけではないが、スコットランド人が知的労働のみならず職人的作業も厭わず、植民地支配者的メンタリテイとは別に、海外であるはるか日本へ雄飛してきたことにその民族性を思う。他方、ドイツ系の人物もまた日本とのつながりが深い。伊藤博文に憲法作成の指導をしたシュタイン、士官学校でドイツ兵学の講義をしたメッケル、建築家のベックマンとエンデ、医師のベルツ、さらに哲学におけるケーベルは、ドイツ系学問を日本にもたらし功績者である。本稿は、日本近代美学形成におけるドイツ的契機を確認することを目的として、その基盤の追究をするものである。

宮永孝の研究によれば<sup>(1)</sup>、日本におけるドイツ語学習の本格的な開始は幕末にまでさかのぼり、1860年(万延1年)7月のプロシアによるオイレンブルク派遣の際に、蕃書調所教授であった市川兼恭、加藤弘之らにドイツ語学習が命じられたのが最初のようなのである。翌年には日普修好通商条約が調印されている。1862年には日本最初の独和辞典である『宮版 独逸単語篇』が出版されている。そして明治に入ると、法律の分野では後述のように憲法をはじめ、民法・刑法の主要な法律、軍隊制度においても、幕末明治初頭におけるフランス兵学の影響から離れて、ドイツ兵学が主流となる。さらに1869年には、明治政府は官立医学校におけるドイツ医学の採用を決定する。ドイツ学を導入・受容しようとする傾向は、さらに人文学の分野、とりわけ哲学においてきわだっていく。

本研究は、ドイツ学受容において、ドイツにおける近代化と近代哲学・美学の成立・展開との関係を視野に入れながら、そうしたドイツ哲学・美学を積極的に受け入れようとした近代日本の社会的政治的、そして国際関係的事情を考慮に入れる。そしてさらに、そのようにして受容されたドイツ哲学・美学が、近代日本の哲学研究・美学の形成に与えた影響や功罪についても論究することをめざしている。

人文学の領域において、蘭学が洋学の唯一の代表であった時代を経て、仏(フランス)学に中江兆民(1847-1901)、露(ロシア)学に二葉亭四迷(1864-1909)、英(イギリス)学に夏目漱石(1867-1916)と、明治の知識人は学者としてもそれぞれの主専攻とした語学・外国事情に通じて一級の業績を残した。そして独(ドイツ)学では森鷗外(1862-1922)が際立つ。上

記の知識人は、小説や評論も公刊しながら、他方で美学に関する貢献もしている。兆民の翻訳『維氏美学』（1883＝明治16年）、四迷のベリンスキー紹介（「ベリンスキーの芸術論」明治18、19年頃）、漱石の『文学論』（1907＝明治40年）・『文学評論』（1909＝明治42年）といったものがその例であり、鷗外にはハルトマン（『審美論』1892＝明治25年；『審美綱領』1899＝明治32年）、フォルケルト（『審美新説』1900＝明治33年）ほかのドイツ美学の意識的翻訳がある。

ただし、近代日本の美学研究に関する上記の例は、「美学」講座が世界の大学中最初という画期的な試みとして東京帝国大学に開設された（1899＝明治32年）のに対して、あくまで“在野”の美学研究でしかない。そして、英仏露といった諸文化の紹介や翻訳が進みながら、興味深いことに、制度化された「美学」講座は、哲学講座と同様に、ドイツ学・ドイツ美学を中心とするものであった。なぜ哲学系の学問がドイツ学に傾斜したのか、その経緯、背景、功罪について考究していきたい。

ベルリン大学への日本人留学生に関する Rudolf Hartmann 教授のすぐれた研究成果<sup>(2)</sup>を参照すると、明治以降の哲学・美学研究の主流をなした学者たちのほとんどがベルリン大学に留学しているという興味深い事実にくわす。明治以降の西洋文明摂取の狂奔状態のなかで、医学や工業技術や軍事技術については理解できるとしても、人文学においてすらドイツ学が模範として選択されたのはなぜなのだろうか。森鷗外『独逸日記』明治19年2月20日の記述によれば、午後5時からの夕食会の際に、ドイツの軍医総監兼侍医のギリシア語を引いたスピーチや外国人軍医にまじって、鷗外もドイツ語で挨拶をしたらしい。「余もまた久く独乙国の文物兵制を慕ひ、今夕の会頗る素懐に酬ゆとの意を陳べたり」<sup>(3)</sup>。ここでいうところのドイツへの賞賛とはどのような内容であったのか。

本稿は「日本近代美学におけるドイツ（学）的契機」と題する研究の序章をなす。結論先取り的に言えば、本研究の標題は、「ドイツ的」をいっそう強調して「日本近代美学におけるくドイツ美学的くドイツ学的くドイツ的契機」とするのがより内容に合致するであろうし、さらに厳密には、くドイツ的くよりもくプロイセン的くとする方がより正確かもしれない。

私の近代日本美学史研究の一部は『主体の学としての美学—近代日本美学史研究—』（晃洋書房、2007）としてまとめたが、始まりは森鷗外による審美学についての研究であった。その際には、くドイツ学くという一般的観念はさして私の注目するところではなかった。ところが、明治美学史の展開を追跡研究していくにつれ、森鷗外のみならず、西周、亀井茲明、高山樗牛といった人物およびそれぞれの美学的業績を吟味していくと、彼らにおけるドイツ学・ドイツ的要素に関心を持たざるを得なくなった。

まず、森鷗外については上述のように、彼が「審美学」として翻訳叙述したハルトマンほかのドイツの美学者への関心は大したものである。西周とドイツ学との関係については、彼はという経緯から独逸学協会学校の初代校長である。この学校は前身をドイツ文化と学問を学ぶ目的で1881年（明治14年）に設立された独逸学協会であり、1883年（明治16年）に、当時ドイツ語を教える唯一の中学校として設立された。現在の独協学園、独協大学の前身である。高山樗牛におけるニーチェへの傾倒はいうまでもなく、亀井茲明については、ベルリン大学に留学して3年にわたり美学や美術史の講義を受講し、さらに膨大な数の書物の購入のみならず染

織をはじめとする作品のコレクションをした人物である<sup>(4)</sup>。

明治から始まった、国家意思ないし国民の“合意”的なドイツへの傾斜は、おそらくは第二次世界大戦における枢軸形成とその崩壊に至って、ひとつの盛期の結末を迎える。〈日本人論〉的に、日本人とドイツ人との国民性の類似（勤勉・規則尊重・集団性など）を云々するのはあまりに俗論的である。それはともかく、なにゆえに明治日本がヨーロッパ諸国の中でドイツを範に仰ぐに至ったのか、いくつかの契機を考察してみたい。そしてそれが人文学にも及んだ理由は何であったろうか。

この主題に関して、以下のような論点が論究に必要であろう。

- 1、岩倉使節団によるドイツ見聞
- 2、憲法制定に際してのドイツ・オーストリア法学者への接近
- 3、青木周蔵と明治政府の西欧外交
- 4、ベルリン大学留学生
- 5、後進近代国家形成という国情
- 6、ドイツからの日本への接近
- 7、お雇い外国人教師
- 8、哲学・美学研究の主流としてのドイツ哲学・美学

——以下において順次、上記のような論点を、予備知識を確認する目的でスケッチする。本稿では、1～4をとりあげる。

## 〔1、岩倉使節団によるドイツ見聞〕

導入として岩倉氏使節団によるドイツ訪問を取り上げるのがよいだろう。明治維新の3年後、横浜を出発したのが1871年12月23日、そして途中帰国や現地に留学などで留まった者を除いて帰国したのが1872年9月13日であった。国王ヴィルヘルム一世を皇帝としてドイツ帝国という連邦制の統一国家の成立は、使節団出発の年、すなわち1871年である。ドイツ視察は、まず北ドイツのプロイセンへはオランダから入って1873年3月7日から28日まで（そのうちベルリン滞在が3月9日から27日まで）、次に南ドイツ連邦などが1873年5月1日から6日まで、その間にハンプルク、フランクフルト、そしてミュンヘンを訪れている。滞在日数的には、アメリカ、イギリスに次いで長い。一行に同行した、津和野藩当主亀井茲明の実兄である建築家の松ヶ崎萬長は、ドイツで一行から別れ留学を始めている。使節団の実質的な公式記録といってもよい<sup>(5)</sup>久米邦武『米欧回覧実記』のなかで、ドイツに関する記述は、「第三編 欧羅巴大洲ノ部 上」のうち「第55巻 普魯士(プロイス)国ノ総説」「第56巻 普魯士西部鉄道ノ記」「第57巻 伯林(ベルリン)府総説」「第58巻 伯林府ノ記上」「第59巻 伯林府ノ記中」、そして「第60巻 伯林府ノ記下 附「ポツタム」」において、「第四編 欧羅巴大洲ノ部 中」のうちに「第66巻 北日耳曼(ゼルマン)前記」においてロシアと国境を接する地域、ケーニッヒなどやハンプルクを扱っている。さらに、「第70巻 北日耳曼後記 上」「第71巻 北日耳曼後記下」ではリュベック、ブレーメン、ハノーヴァー、フランクフルト、ワイマール、ドレスデン、ライプチッヒなどについて記されている。また、「第五編 欧羅巴大洲ノ部 下 <sup>つけた</sup> 附り帰

航日程」のうち「第83巻 維納万国博覧会見聞ノ記下」で記されているドイツからの出品に関する記述も興味深い。

田中彰は『米欧回覧実記』にみられる発想は、その後の近代日本を有形・無形、意識的・無意識的に規定しているといってもいいすぎではない<sup>(6)</sup>と断定する。また、岩倉使節団を欧米から捉えようとした共同研究の成果論文のひとつ「ドイツ 二つの新興国の出会い」においてヴァッテンベルクは、久米が「ドイツの重要性を指摘」、と書いている<sup>(7)</sup>。たしかに、全五編、全100巻のうち、アメリカ合衆国とイギリスとが最も多く配分されて各20巻ずつ、ドイツはそれらに次いで10巻が充てられている。滞在日数の長さといい、ドイツへの関心の高さが推測できる。「近年普魯士ノ勢益盛大ヲナシ<sup>ますます</sup>」<sup>(8)</sup>という、ヨーロッパの新興国ドイツと近代日本を重ねるのは容易であろう。「我日本ニ酷<sup>はなは</sup>タ類スル所アリ、此国ノ政治、風俗ヲ、講究スルハ、英仏の事情より、益ヲウルコト多カルベシ」<sup>(9)</sup>と評価している。ドイツ側の対応も「其待遇ノ厚キ、他ノ諸国ニ超エタリ」<sup>(10)</sup>と記され、また、ドイツの好意的な新聞記事があり、ある記事には「日本は学び、受け入れ、模倣している。日本は国を挙げてはつらつたる印象をあたえており、アジア・アフリカの他の諸国とはまったく異なっている。……いつの日かわれわれは日本から学ばねばならないであろう」<sup>(11)</sup>。——こうしてプロイセンと近代日本との幸せな出会いが行われたのである。

## 〔2、憲法制定に際してのドイツ・オーストリア法学者への接近〕

明治14年（1881）の政変により、いわばイギリス的政党政治を目指した大隈重信が失脚し、憲法制定による国会開設を明治23年に、という勅諭が発布されると、伊藤博文や井上毅といった政府首脳はプロイセンに範を求めて憲法に関する調査・研究にとりかかる。岩倉使節団によるプロイセン訪問の9年後の1882年に、伊藤博文は再びプロイセンを訪問することになる。皇帝ウイヘルム1世は伊藤がプロシヤ憲法の調査に来たことに興味を持ち、「抑、一国の憲法なるものは、其の国の歴史に鑑みて制定せらるべきものなるに、貴国が遠く大官を派して他国の憲法を調査せしむるは、果して如何なる理由に基けるや」<sup>(12)</sup>と問えば、伊藤の答えは「君主国にして旧国たる亭露西（プロシヤ）憲法は、必ず取て以て我模範とするに足るものあるべく、且憲法の条項は書籍に依り之を研究し得るも、尚ほ実地に就て見聞せんには益する所必ず多からんと信じ、茲に貴国を訪へるなり」<sup>(13)</sup>。そして彼は、ベルリン大学教授グナイスト（H. Rudolf von Gneist, 1816-1895）とその弟子モッセ（Albert Mosse, 1846-1925）に指導と助言を求めるが、当時の宰相ビスマルクが直面していた立憲政治の難しさを彼らは新生日本に責任を持って課す気にはなれなかったのであろう。ベルリンで失望した伊藤の一行が向ったのはウィーンであった。そこでシュタイン（Lorenz von Stein, 1815-1890）と出会う<sup>(14)</sup>。

ウィーン大学教授であったシュタインは、好意的に日本からの一行を迎える。彼は日本への関心を強め、後年に「日本帝国史および法史の研究」という論文を書いている<sup>(15)</sup>。

シュタインの小論はさすが一般のヨーロッパ人学者らしい、周到な論理展開である。まず彼は、西欧人が西欧以外の世界の事物を奇異なもの・異質なものの・感嘆の念の対象として見る時代から一歩進み、学問対象として拡大していることを指摘するが、その具体例は日本である。

ドイツ人学者による地質学、民族学、芸術、国民経済学、歴史、等々の分野で日本研究が進んでいる現状の中で、唯一「法」についてはその知識が不十分である。しかも法生活の点で日本とヨーロッパは同質である、と言う。（「今や西洋と呼んでも過言ではない極東の地の日本人たち」<sup>(16)</sup>）といった言い方にはやはり西欧中心主義のメンタリテイを垣間見させるが。）シュタインによる日本評価は著しく高い。東アジアの国々を3分類して、第一は軍事的に征服されたインドシナ半島の諸国、第二は植民地化によってヨーロッパに統合されたオーストラリアとその周辺、ニューギニアなど、第三は中国・日本・朝鮮という独立国家である。西欧列強の「太平洋政策」にとって「太平洋の二大帝国である中国と日本」<sup>(17)</sup>のうち「同盟を結ぶ能力」(Allianzfähigkeit)があるのは日本だけである。それゆえに日本に対して学問的芸術的関心を持つことを提唱する。そして、当時日本から若い学者のみならず大人たちもヨーロッパに来て制度と法について学ぼうとしていることに驚嘆する。それは、「世界史においてこのような事態と比肩し得るのはほとんどひとつしかない」<sup>(18)</sup>。「ある国民が国制＝憲法や行政の問題を研究するために他の国民を直接頼ってきた」などということは世界史上ローマ人がギリシアに使節を派遣した事例があるくらいであるが、それはローマ人が自分たちの生活の最も本質的な核をギリシア人と共有していると考えたからであろう。ではヨーロッパと日本に共通するものがあるのか。そこでシュタインは歴史的発展の内実を比較検討する。そして日欧共に氏族制の時代、身分制の時代、公民制の時代を経てきた。公民制の時代は二分され、絶対王政の時代と立憲制の時代とに分かれる。「数十年の遅れはあるものの」「世界中のあらゆる国民のなかで日本ほど明瞭にヨーロッパと同一の発展段階を経てきたものは他にない」<sup>(19)</sup>。日本における絶対主義とは徳川氏による将軍家によるものであり、それが1868年における将軍の解任(維新)と1879年の版籍奉還によって終息する。続いて天皇制によって憲政と行政が進められていくことになるが、ヨーロッパでは1815年から1848年にかけて準備されたことを日本はごくわずかの年月で成し遂げなくてはならず「日本の生活はヨーロッパを動かしているのと同じ生活を経験しており、あらゆる同じ問題や同じ矛盾を抱えている」<sup>(20)</sup>。いずれにしてもこのようにして日本人は「あらゆるアジア的なものから我が身を切り離し、文明国の列に連なった」<sup>(21)</sup>。ただし、日本独自の問題点・課題もシュタインは指摘する。それは、1) 日本的王制、2) 日本的教会制度、3) 婦人の権利、4) 最も重要なもので、法形成の欠如、である。「宗教や哲学は国民意識として持っているが、公法・私法を問わず、明確な法＝権利概念をいまだにもっていない」<sup>(22)</sup>、と。

かくして、伊藤博文を中心とする人たちが憲法草案作りに際して、西欧の実例が参照されたことは、シュタインの論脈からも理解できる。

### [3、青木周蔵と明治政府の西欧外交]

岩倉使節団がベルリン滞在中の1873年3月11日、皇帝ヴィルヘルム一世の謁見が行われたが、その際の日本人一行への挨拶は当時ベルリン大学に留学中の青木周蔵が通訳している。

青木周蔵は、その自伝によれば、長州の小村（厚狭郡小埴生村＝現、厚狭郡山陽町小埴生）医者（地下医）三浦玄仲の長男として1844年に生まれる。ときに木戸孝允より12歳年少、井上馨より10歳年少、伊藤博文より4歳年少である。外相時代の宰相である山形有朋とは7歳年下

である。しかし、当時の雄藩である長州藩のよしみで彼らと交友があったわけではない。医を業として「故に実父の身分は無論平民なり。予、年漸く長じて学に志せしが、封建治下に於ける階級制度の桎梏は、予の如き平民子弟の講学に念ある者をして、頗る困難を感じせしめたり」<sup>(23)</sup>。萩にある藩校明倫館にも士族でないゆえに入学できず、また吉田松陰の松下村塾にも、藩士と伍すことなければ交友が難しいと断念し「予の為には講学の道、殆ど梗塞したる有様なりき」<sup>(24)</sup>と述べている。彼は寺子屋で学問の手ほどきを受けた。

蘭方医青木研蔵の養子となって、長崎で医学を修めたあと、藩命によりプロイセンへの留学が決まる。明治元年10月はじめに長崎出発、12月半ばにフランスのマルセイユに到着する。当時、戊辰戦争のときであり、幕府に肩入れするフランスゆえに「予の仏国軍隊に対する興趣は、甚だ尋常ならざるものあり」<sup>(25)</sup>。そして、ベルリンへの途中、マルセイユからパリへと旅してフランス人と接するうちに、フランスとプロイセンとの、とくに軍隊の面からの比較をするようになる。フランス人はドイツをかた田舎と呼び、プロイセンは驕慢無礼の国、よっていずれ懲らしめの軍を派遣し征伐するであろう、という大言にも接するが、明治7年までプロイセン留学を全うする。そして外務省に入り、駐独大使を務め、ドイツ派人脈の枢要な位置を占めていく。1889年には第一次山形有朋内閣の外相に就任し、条約改正交渉に尽力する。ドイツ貴族の娘と結婚、一貫して親独派の中心人物であったようだ。

青木の風貌について森鷗外は「大発見」という小編の中で、「独逸婦人を奥さんにしておられるということだから、所謂ハイカラアの人だろうと思ったところが、大当違で、頗る蛮風のある先生である」<sup>(26)</sup>と書いている。『独逸日記』中でも、初対面の印象を「容貌魁偉にして髭多き人なり」<sup>(27)</sup>と記している。鷗外がベルリンに留学したときの特命全権公使が青木周蔵であった。「僕が洋行した時の事である。僕は棕鳥 [= 田舎者] として輸出せられて、伯林の真中に放された。」<sup>(28)</sup>。面会に行ったところ、青木は鷗外に対して言う、「まあ、学問は大概にして、ちっと欧羅巴人がどんな生活をしているか、見て行くが宜しい」<sup>(29)</sup>。青木は、日本の若者が勇んで海外に留学したときに、本当に学ぶべきことは何であるかを、おそらく自身の体験を踏まえて心得ていたのだろう。『独逸日記』明治17年10月13日の記述に、「公使のいはく、衛生学を修むるは善し。されど帰りて直ちにこれを実施せむこと、恐らくは難かるべし。足の指の間に、下駄の緒挟みて行く民に、衛生論はいらぬ事ぞ。学問とは書を読むのみをいふにあらず。欧州人の思想はいかに、その生活はいかに、その礼儀はいかに、これだに善く観ば、洋行の手柄は充分ならむといはれぬ」、とある<sup>(30)</sup>。

のちに鷗外は自らのヨーロッパ体験をふまえて次のような見識を記している。「西学の東漸するや、初その物を伝へてその心を伝へず。学は則格物窮理、術は則方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知りて、その徳義の民たるを知らず。況やその風雅の民たるをや。是においてや、世の西学を奉ずるものは、たゞ利を是れ図り、財にあらでは喜ばず」<sup>(31)</sup>。多くの留学生の求めたものがたんなる知識・情報・文物であるとばかりいえないが、しかし、鷗外が見たものはヨーロッパ人の教養・人格・社交の豊かさであり、それゆえのヨーロッパ的伝統と歴史の底力も感得していたのであろう。

#### [4、ベルリン大学留学生]

石附実によるすぐれた研究『近代日本の海外留学史』（中公文庫、1992）では、まずは幕末の幕府と雄藩による留学生派遣政策をとりあげて、幕府によるオランダ留学生派遣、長州・薩摩によるイギリス留学、幕府によるロシア・英仏留学、と各章を分けて論じているが、そこにドイツは出てこない。しかし、明治に入ると、俄然ドイツ留学へとなびいていく様子が統計的にも示される。

明治哲学界を主導した日本人哲学研究者の多くがベルリン大学へ留学していることを知るには、Hartmann 教授の次の研究が便利である。

Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870-1914; 1920-1945* (フンボルト大学森鷗外記念館、2000)

すでにドイツ語圏への日本人留学生に関する研究には Michael Rauck 氏による次の研究もあった。

Michael Rauck, *Japanese in German Language and Cultural Area, 1865-1914: A General Survey* (経済と経済学 別冊), 東京都立大学経済学部・東京都立大学経済学会、1994

しかし、とくにベルリン大学に限定すれば、Hartmann 教授の研究に如くものは無い。そして、それを活用すると、ベルリン大学への留学生に関して以下のような興味深い事実を知ることができる。

- 1、最年少の留学生については、18歳の藤山治一（1880年より Landwirtschaft [国土経済学科] に所属）、同じく18歳の山県伊三郎（1875年より Recht に所属）。  
法学志望が多いなかで、21歳の中島力造も若く、彼は1889より Philosophie に所属している。
- 2、最高年齢者では、渡辺龍聖、45歳、1910年より Ethik 学科に所属。
- 3、哲学・美学分野ではドイツの中でも、とくにベルリン大学への留学生がきわめて多い。井上哲次郎は1886-87、大塚保治は1896-97、深田康算は1908-09、金子馬治は1902-03、というふうに学生としての登録の記録が残されている。ほかにも、1872年から1912年に至るまでの〈Philosophie〉の登録者をみてもその数48名に及び、その中には姉崎正治（1901）、有賀長雄（1887-1888）、亀井茲明（1887-1890）、そして〈Aesthetik〉には唯一大塚保治（深田は Philosophie に登録）が、〈Philologie〉には芳賀矢一（1900-1902）、保科孝一（1911-1912）、といった国文学者が在籍している。

#### [むすび]

ここでなぜドイツ（学）か、という問いは、なぜプロイセンか、なぜベルリン大学か、という問いへと進むのは必然であろう。

こうして、ドイツ、ドイツ学、そしてプロイセン帝国、ベルリン大学が、日本近代美学との関係で浮き彫りになっていく。その理由はなぜか。また、それゆえにどのような影響や思潮をのちの哲学史・美学史、そして哲学的思索及び美学研究に与えてきたのか。



時代状況として前提的知識として確認すべきことは、第1に、日本の政治的近代国家建設のモデルとしてのプロイセン、及びドイツ帝国と日本との多面的関係が生成発展しつつあったということ。すなわち、ドイツ学の積極的導入の社会的・国家政策的背景について、政治史・国際関係史・学問史の観点から追究する必要があるだろう。むろん、たんに資料に即した実証・検証や理論的解釈のみならず、どのような人物がどのようにドイツ学導入に、直接的または間接的に貢献したかという人脈や人的要素にも注目したい。第2に、その状況下において、人文学的分野においてもドイツ、とりわけプロイセンの学問、ベルリン大学に關係する人脈に追従した理由も研究する必要がある。その際にも、影響力のあった学者・人脈と学閥・学派・人的関係や、学問に関する考え方（学問観）についても論究せねばならないだろう。そして第3に、その結果としての近代における日独関係、日独の人的関係、そして日本の人文学、とりわけ哲学・美学研究の発展と成果を追跡しなくてはならない。

たしかに、人文学関係の研究者が多くドイツ、それもベルリン大学に留学し、またケーベルをお雇い外国人教師として招聘したこともあいまって、近代日本の人文学の基本はドイツ学的様相をつよく帯び、近年まで（つまり哲学科においてイギリス哲学が講じられるようになるまで）それが主流を成してきた。しかし、そうしたドイツ人文学への過剰な評価も適度にすべきだろう。1886年創設の帝国大学がドイツの大学を真似てつくられたというのは誤解であり日本がドイツ帝国から輸入したのは大学の理念ではなく国家が官僚や人材を養成するという考え方だけ<sup>(32)</sup>、というのも一理ある。欧米諸国が産業化と工業発展を促進して国民国家を帝国主義へと導いているときに、後発の日本が人文的教養を持つドイツ的エリートの理想を日本に移植しようとしたとはたしかに考えにくい。もっとも、官僚教育を国家的課題としたのはドイツだけではなく、フランスのエコール・ノルマル制度もその実例である。それでも範をプロイセンに求めたのは、理念的理由よりも政治的理由であろう。次稿で「後進近代国家形成という国情」という論点を扱うゆえんである。

#### [注]

- (1) 宮永孝『日独文化人物交流史—ドイツ語事始め』三修社、1993
- (2) Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870–1914; 1920–1945*, フンボルト大学森鷗外記念館、2000
- (3) 『森鷗外全集13 独逸日記／小倉日記』ちくま文庫、p. 94
- (4) 濱下昌宏『主体の学としての美学—近代日本美学史研究—』（晃洋書房、2007）、第2章、第3章、第7章等を参照のこと。
- (5) 正確には公式記録ではない。同書、岩波文庫版（一）、p. 412、田中彰による解説参照のこと。
- (6) 同書、岩波文庫版（五）解説、p. 380
- (7) Nish, Ian, *Iwakura Mission in America & Europe*, Curzon Press, 1998  
イアン・ニッシュ編『欧米から見た岩倉使節団』麻田貞雄他訳、ミネルヴァ書房、2002、p. 153
- (8) 前出書、岩波文庫版（三）、p. 265
- (9) 同上書、p. 298
- (10) 同上書、p. 302
- (11) ヴァッテンベルク、ニッシュ編前出書、p. 162
- (12) 『青木周蔵自伝』（坂根義久 校注）、東洋文庫168（平凡社）、p. 236

- (13) 同上書、pp. 236-237
- (14) 瀧井一博『文明史のなかの明治憲法—この国のかたちと西洋体験—』講談社選書メチエ、2003、pp. 96-136
- (15) *Oesterreichische Monatsschrift für den Orient*, 13Jg., 1887、所収（瀧井一博訳『JURISPRUDENTIA 国際比較法制研究』第4号、ミネルヴァ書房、1995）
- (16) 同上、瀧井訳、p. 55
- (17) 同上、p. 58
- (18) 同上、p. 59
- (19) 同上、p. 62
- (20) 同上、p. 70
- (21) 同上。
- (22) 同上、p. 71
- (23) 青木、前出書、p. 3
- (24) 同上。
- (25) 同上、p. 18
- (26) 『森鷗外全集 1 舞姫／キタ・セクスアリス』ちくま文庫、p. 170
- (27) 『森鷗外全集13 独逸日記／小倉日記』ちくま文庫、p. 8
- (28) 『森鷗外全集 1 舞姫／キタ・セクスアリス』ちくま文庫、p. 168
- (29) 同上、p. 170
- (30) 『森鷗外全集13 独逸日記／小倉日記』ちくま文庫、p. 8
- (31) 森鷗外「柵草紙の本領を論ず」、『森鷗外全集14』ちくま文庫、1996、p. 7
- (32) 中山茂『帝国大学の誕生—国際比較の中での東大—』中公新書、1978

[本稿は2004年度本学研究所研究助成による成果の一部である。]

(原稿受理 2007年10月 5 日)